

がん哲学センター

(旧金沢がん哲学外来から発展)

代表: 山田圭輔

(金沢大学附属病院緩和ケアセンター長)

1. これまでの取組内容
2. 具体的な成果
3. 今後も継続して実施する必要性
4. 今後の取組と期待される効果

1. これまでの取組内容 (以下の2本柱があった)

1) がん哲学外来の実践

がん患者は、がんの経過中に死を意識し、自身のことを無力、無意味、無価値と嘆き、絶望してしまうスピリチュアルペインに悩まされる。しかし、これらの苦悩への専門的な対応は殆どなされてこなかった。

がん哲学外来は、医療者と患者が対話することで、患者が自身のスピリチュアルペインに向きあい、気持ちを落ち着かせ、考えを整理でき、苦悩を軽減する専門的な外来で、我々は故西村元一医師らと金沢がん哲学外来を発足させた。

2) がん哲学に関する教育

がん哲学外来では、客観的で論理的な科学的思考ではなく、主観的で類比的な哲学的思考で生と死を考え、話し合えることが必要である。これを促すためには、医療者が自らの死生観や人生観を表現できること(これをがん哲学と表現する)が必要で、専門的な教育が要する。

我々は特に金沢大学医学生を対象に教育と実習を続け、そのレポートをもとに、広く医療者と一般県民に、がん哲学の概念を知らせ、啓蒙活動を続けてきた。

2. 具体的な成果

1) がん哲学外来の実践

故西村元一医師の尽力で、金沢市石引に「元ちゃんハウス」として開設され、多くのスタッフと共に運営されている。金沢市、金沢医療センター、金大病院ともがん患者支援に関する協定を締結されている。

2) がん哲学に関する教育

1) 金沢大学医学生を対象に、講義と臨床実習を10年以上に続け、実習報告書を11年連続で作成し広く紹介した。ほぼ全員が医師国家試験に合格し、医師として活動している

2) 金沢大学薬学類、石川県立看護大学大学院で毎年講義や実習を続け、多くが薬剤師またはがん専門看護師として活動している。

3) 金沢がん哲学外来オンライン講演会を、(全国の)一般および医療者を対象に開催し、がん哲学の概念を広めた。記録集を作成し、全国に広く啓蒙している。

4) 金沢市医師会、石川県薬剤師会、金沢大学十全同窓会の協力を得て、各会報で数年以上に渡り、がん哲学を広く啓蒙している。

2-1-1. 具体的な成果：
金沢がん哲学外来オンライン講演会に関して
第39回以降メインテーマは「生と死を考える」としている

第38回(令和2年11月:参加者98名)

- 1) 緩和ケアにおけるACP「人生会議」とするために
- 2) 金沢大学医学生と「生と死」を考える
- 3) がん専門の精神科医が学んだこと

第41回(令和3年9月:参加者106名)

- 1) 死は全ての人が直面している問題である
- 2) 幸せな結末
- 3) 医療におけるスティグマ

第39回(令和3年2月:参加者118名)

- 1) 公認心理師が「生と死」を考える
- 2) 生と死を考える対話
- 3) 生きる意味への援助

第42回(令和4年2月:参加者82名)

- 1) 美しいとは何だ
- 2) 私が緩和ケア医になった理由
- 3) 繋がりの中で生きる

第40回(令和3年6月:参加者110名)

- 1) いま生と死を考えることの意味
- 2) メメント・モリから生と死を考える
- 3) 生と死と緩和ケアと

第43回(令和4年6月:参加者111名)

- 1) 苦境の中を生きる
- 2) わたしの死生観:しあわせに生きる
- 3) 突然の死・予期せぬ死

2-1-2. 具体的な成果：
金沢がん哲学外来オンライン講演会に関して
第39回以降メインテーマは「生と死を考える」としている

第44回(令和4年10月:参加者101名)

- 1) 生きるを考える
- 2) 「生きる」は線, 「死」は点
- 3) 自分の「逝きる」を考える

第45回(令和5年2月:参加者129名)

- 1) 生と死の間に立つ
- 2) いち緩和ケア医にとっての死
- 3) 足し算命でしぶとく生きる
- 4) 良き生, 良き死

(番外編)

第62回石川県地域緩和ケアカンファレンス
(令和5年2月:参加者49名)

- 1) 金大病院で「生と死」を考える
- 2) 血液がん患者の生死と向き合う
- 3) 小児科医が子どもの死と向き合うこと

第38～45回全てのオンライン講演会記録集を作成し、
石川県内および全国の関係者に配布してきた。

3. 今後も継続して実施する必要性

(がん哲学センターとしてがん哲学に関する教育に特化して継続する)

1) がん哲学センターとしての発展

- 1) がん哲学外来の実践は、今後も「元ちゃんハウス」として継続する。
- 2) 大学スタッフを中心に、がん哲学に関する教育に重点を置く「がん哲学センター」の活動を継続する。

2) がん哲学に関する教育を継続する必要性

超高齢社会および多死社会を迎えている現代において、検査-診断-治療を
発展させるだけでなく、死を含めて語り合うACP(アドバンス・ケア・プランニング)の
重要性が増している。そのためのがん哲学の概念は必須である。

ACPに関わるのは医師だけでなく、看護師や薬剤師やソーシャルワーカー等も重要な役割を果たす。今後も幅広く教育、研修、連携を続けていくことが必要である。

4. 今後の取組と期待される効果

1) がん哲学センター：病院薬剤師との連携を深める

- 1) 病院薬剤師に対するがん哲学教育が遅れており、重点的に対応する。
- 2) 他医療職（医師，看護師，ソーシャルワーカー，医療系学生）への教育，啓蒙活動も続ける。

2) がん哲学センターによる教育および啓蒙活動

超高齢社会および多死社会を迎えている現代においては、死を含めて人を診る全人的な医療が必要であり、がん哲学は全人的医療の基盤になる考え方である。

今後も医療系学生および医療多職種が、がん哲学を学び、連携することが求められており、がん哲学センターの活動が全国から注目されている。

期待される効果

医療者が、がん哲学の概念を学び理解することで、がん（その他の病気を含めて）を抱えながらも、死まで自分らしく生きることおよび支援することが可能になる。

がん哲学は、今後の多死社会を迎える県民（国民）の医療文化の基盤となりえる。